

吉野葛をめぐる 冬の夜の幻想



「葛」と「藤」
二人のカリスマ

Grasshouse

「葛」と「藤」二人のカリスマ

この冬、宇都宮の実家の大掃除をしていたところ、棚の奥から、賞味期限切れの吉野葛が出てきた。「吉野本葛」、裏書きに森野薬園（現在は森野吉野葛本舗）とある。

森野藤助さん謹製の品。昭和天皇御視察、仏蘭西巴里大博覧会受賞と麗々しく記されており、創業四百年とあるが、さらにその歴史は南北朝時代に遡るといふ。森野薬園の起源は、南朝の忠臣がはじめた老舗であり、宮内庁御用達、大嘗祭にも献上された品だといふ。となると、かの後醍醐天皇も食した由緒ある吉野葛ということになる。なんだか伝奇小説や南朝秘史めいた雰囲気が出てきた。

大方、死んだ父親あたりが、旅先で気まぐれに買ってきたものだろう。鯉節だの素麺などといっしょに無造作に棚に突っ込まれていたのだから、細かいところを読まなければそのままゴミ箱行きだったはずだ。葛切りは寒天の変種、葛粉は片栗粉の化け物ぐらいに思っていたら、とんでもないことになった。賞味期限切れとはいえ、乾き物だし、親の形見でもあるし、まさか食べて即死することはないだろうと思って、悪い好奇心の虫が疼いて、寒い台所で、コトコトと鍋で煮てみたのである。

冷蔵庫に小豆（これは賞味期限内）があったので、半透明な吉野葛をまぜて、茶碗に入れて啜ってみた。ものすごくおいしい、というわけではない。しかし、ほのぼのとして、何とも心が和む。吉野山の冬は、寒いだろう。あの密教狂い（真言密教立川流／髑髏崇拜と性秘術で有名）の後醍醐天皇も、やるせない、わびしい、鬱憤に満ちた吉野暮らしを、こんなものを啜って慰めていたのだろうか。鯉鬚を生やして始皇帝のようにふんぞり返ってはいるが、あれでなかなか可愛いところがある……そんなことを考えながら、甘い汁を啜っていると、妙にじんわりとした可笑しさが湧いてくる。歴史の襞の味わいがしみじみと滲んでくる。

ところが、ほのぼのとしてきたのは、気持ちだけではなかった。深夜、ふと気がつくとき、妙に体が温かいのである。宇都宮という所は、東京よりもかなり寒い。文化果つる地、北関東である。花の吉野とは比ぶべくもないが、朝方は霜が降り、銀色の歯のような柱が、庭に敷かれた朽葉をざくざくと持ち上げている。考えてみても、吉野葛以外に、このぽかぽかする体感の原因は見当たらない。とはいえ、別に風邪をひいているわけでもなく、体調も悪くない。

うかつだったのは、風邪の古典薬である葛根湯が、葛の根エキスだということに、思い至らなかったことだ。無知を晒けだしていえば、「葛」という字は同じでも、漢方のもっと特殊な薬用植物だろうぐらいにしか、私は考えたことがなかった。あの野山に這い回る褐色の太い蔓、生命力旺盛なわりには、繊細な紫色の花をつけるあの葛だとは思わなかったのである。そういう曖昧な表記は、こと漢字にはよくあるものだ。同じ字が日本と中国では、まったく別の植物を指していたりする。

まあ、そんなクドクドしい弁解はどうでもいいとして、体温を計ると、三六度八分ある。やや高めだ。以前、葛湯や葛菓子を食べたときには、こんなことはなかったように思う。流行りの本によると、体温が標準よりも下がると、免疫力が落ちて癌などの病気になりやすいそうだ。こんなふうな高めの体温を保持できれば、病気になりにくいということになる。賞味期限切れの吉野葛を捨てずに、自ら人体実験してみて、思わぬ発見をした。

さて、調べてみると、この吉野葛、ほんものはなかなか入手しにくいようだ。別に購入できないわけではなくて、スーパーなどでは紛い物が多くて、ほとんどがジャガイモのデンプンを「葛切り」とか「吉野葛」という名称で売っているのを、無自覚に掴まされるのだ。さすがに偽装ばやりのご時世だ。わが国もこの分野では中国に負けていない。

現在「吉野本葛」というのは、日本の吉野葛の百パーセント粉のものに限られているそうである。「吉野葛」の表記ならば六十パーセント以上でOKだ。本葛の極上品となると、数千円もしてしまう。なんでそんなに高いのかというと、まず「掘り子」と呼ばれるその道のプロが山野に分け入り、土中に強靱に根を張った野生の葛の塊を掘り出すのが、大変な重労働だ。良品は、人間の片足ほどもある。その根を粉碎し、真冬にどす黒い液状のものを漉して桶で沈殿させ、「寒晒し・吉野晒し」といわれる工程を何度も経て、精妙な白い葛粉にするまで、非常な労苦を要するという。それで伝統的な技能を持つ職人が高齢化し、激減しているとのことである。しかし大半は、中国産のもの、ほとんどジャガイモ、サツマイモ、単に無神経に「吉野葛」と称している何だかわからないデンプン粉、さまざまな正体不明のニセ物が店頭で勢揃いしているということなので、その辺の知識を持ってお店で眺めてみても面白いだろう。

そういえば、何年か前、知人と吉野山に遊んだときに、金峯山寺の参道脇の古い茶店で、葛切りや葛餡、葛菓子売っているのを思い出した。斜面に着き出したテラスで、夏木立を眺めながら蝉時雨を浴びつつ、つるりとした冷たい葛切りや水菓子を味わうのは、なかなか乙なものであった。店先の日陰で何か白いものを缶の中の水につけている風景があったが、あれも葛作りの工程のひとつかも知れない。

この土産物屋や旅館の並んだ細い参道では、胃腸薬の陀羅尼助丸も売っていた。関東ではあまり知られていないが、陀羅尼助丸とは、役行者が藤原（中臣）鎌足の腹痛を治したとも伝えられるキハダを主成分とした生薬で、この時代の修験者というのは、まさしく薬剤師でもあったわけだ。

さて、その時は蔵王権現のご開帳が目当てだったのだが、これは豪壮雄大な蔵王堂の奥に安置されている秘仏である。中央に釈迦如来、左右に弥勒菩薩、千手観音を並べた三身仏は、恐るべき迫力を秘めた彫刻であった。

高さ約七メートル。俵屋宗達の風神雷神を、もっと凄まじくしたようなもの、と云ったら多少ニュアンスが伝わるだろうか。桃山時代、豊臣家の寄進による再興時の作だ。

釈迦、弥勒、千手観音といいながら、三身はいずれも同様に、髪逆立て独鉗を握りしめ、不動明王が片足をあげたような猛々しい忿怒尊である。虎の毛皮までまとっている。日本特有と解説さ

れてはいるものの、どう見てもバラモン教、ヒンズー教、シヴァ神あたりが入り込んでいる。それはともかく、仏教美術としても、日本にこんなものがあつたのか、というぐらいの他にまったく類をみないものだ。たとえば、岡本太郎が見たら狂喜しそうな日本文化の例外的美意識の「爆発」である。黒みがかつた群青・藍ともつかぬ吸い込まれそうな宇宙的闇、インディゴ・ブルーを帯びたディオニソス的魔神が、上から覆い被さるように睥睨している。これはもう、わび、さび、雅の美を、遙かに超えている。それでいて、どこか根源的な血、DNAに訴えるものがあり、私は、この巨大な魔神（実は仏身なのだが、印象としては三魔王だ）に、ひたすら呆けたように見惚れていた。

こんなものを作らせた蔵王権現信仰、その精神世界とは、一体いかなるものか——ということになると、やはり役行者（役小角）に触れないわけにはいかない。

『続日本紀』『日本霊異記』『今昔物語』に記されている役小角は、具体的な生没年までわかっているのだから、ほぼ実在の人物だろう。現在の醍醐寺、聖護院、金峯山寺をはじめとする山岳仏教（山伏・修験道）の開祖とされるカリスマだ。諡号は、神変大菩薩。よく山歩きなどをすると、長い杖を握りしめ、高下駄を履いて臍を出して、にんまりと笑っている奇妙な老仙人の像に出くわしたりする。寿老人とネズミ男を合わせたような石像で、ときおり小鬼を二匹従えていたりするあの御方である。この役行者は、孔雀明王の呪を体得し、五彩の雲に乗って空中飛行したり、鬼神を使役したり、母親を鉄鉢に入れて唐へと旅立ったりなど、あまりにも伝説的色彩が強い。

蔵王権現という異様な仏様は、役行者が、吉野山中で修行中に感得した最後の仏だという。禅定に入ると、最初に弁財天や地藏菩薩が現れたものの、ソフトな慈悲の神仏では、麻が乱れるごとき末世は救えない、ということで、釈迦、観音、弥勒を融合し、しかも忿怒相と化した最終兵器ともいべき蔵王権現が、大地を震わせ、ものものしくご降臨となった。独鈷を握り、片足をあげ、怒髪天をつくあの物凄い姿である。

役行者の生きた時代とは、ちょうど、蘇我入鹿を暗殺した大化の改新（六四五年）から、壬申の乱（六七二年）の時代、天智・天武・持統・そして文武天皇にかけての大変な時期である。ちょうど日本の律令制度が完成に向かう頃だ。その頃の吉野の思想ドラマというだけで、これは十分に面白い。吉野大峰の山岳を壮大なる両部曼荼羅と見なす修験道の世界観は、この時期に萌芽を見た。この極東の島国において、神・仏・道、そして釈迦・観音・弥勒の大総合というとんでもないことをおこなったのが、役行者ということになる。さすがに神変大菩薩である。

吉野といえば桜である。桜の花が、どうしてこれほどまでに日本人の心のシンボルとなりえたのか。じつはこの時、役行者が祈り出した蔵王権現を、脇に生えていた桜の幹に彫りつけたことに始まるという。もともと吉野一帯は、山桜の多い土地柄だったことに加えて、それ以来、噂を聞いた皇族、貴族たちが吉野詣でを始め、桜の苗木を持ち寄って植樹をすることが習わしとなった。それでますます吉野全山が、桜のメッカとなったそう。万葉や古今新古今で詠まれた「桜」の背景には、杖をつき高下駄を履いた役行者が、にんまりと笑みを浮かべて座っているのだ。現在では、下千本、中千本、上千本、奥千本あわせて、四千本ならぬ、数万本の桜の名所

だという。それが後々、日本の国花にまで出世し、さらには日米友好の象徴として、ワシントン D.C. のポトマック河畔に三千本の桜の苗木が植えられた。いまでは毎年、駐車場に入りきれないほどの大賑わいの桜見物だというのだから、役行者の神通力たるや、実にグローバルというほかはない。

いや、桜ではなくて、葛の話だった。老舗の森野薬園によれば、吉野葛は、後醍醐天皇と一緒に吉野山中に分け入った南朝の忠臣が作ったことになっている。しかし、吉野川上流の山里には、神武天皇の東征の頃から、葛を漉してその澱粉を食糧としていた国栖人（くずびと）と呼ばれる山の民がいたらしい。稲作の代用としての炭水化物の摂取である。その国栖の一族は、大海人皇子（天武天皇）が近江から吉野山中に逃げてきたとき、大友皇子側の追っ手から匿い、後には壬申の乱の旗揚げを支援したようだ。その辺りに、どうも併走している役行者一派の影が、ちらついてならないのである。大海人皇子が満開の桜を夢で見たとき、それをクーデター成功の吉兆と夢判断したのは、役行者の高弟の角乗だ。その地は、現在の吉野山の桜本坊という寺となっている。

私としては、ここで天武天皇、国栖人、役行者の三極を、じかに《吉野葛ネットワーク》《吉野葛コネクション》として補助線で結びつけてしまいたい誘惑にかられるのだ。むろんそんなことは、いまとなっては推測するばかりである。おそらく彼らは、吉野山の冷え冷えとした冬、こぞって葛湯を飲んでいたに違いないのだが……。

役行者の弟子の修験者たちも、国栖人とともに、山人に身をやつし、生活を共にし、葛の根を掘り起こし、自給自足の携帯食料・薬として葛粉、葛湯を用いていたのだろう。あのぽかぽかと体の底から暖まる感触は、厳冬の大峯奥駈け修行や、苛酷な滝行の必需品だったに違いない。また「靈験」「ご利益」を売り物にした彼らは、活動資金として、各地で吉野葛や、陀羅尼助丸を広めたはずだ。

——どうも、「葛」という文字が、ひっかかってならない。

山岳修験の祖・役行者が育ったのは、河内と大和の境の葛城山であり、この謎の人物は、生涯「葛」の粗末な服をまとして、仙人食といわれる松の実などを食べて、岩窟などで瞑想していたという。葛は葛粉を抽出する過程で、麻と同様に強靱な繊維が副産物として残され、この葛布は粗末な衣服として用いられた。日本史上、最もミステリアスな人物である役小角には、奇妙に「葛」の符丁が多いのである。

じつは、中国でも「葛」「諸葛」など葛の字のつく名前は、神仙思想と、何らかの関わりを持つ者が多い。道教のバイブル『抱朴子』『神仙列伝』の葛洪。『三国志』の知将で奇門遁甲を駆使した諸葛孔明（実像は物語とかなり違うらしいが）。さらには、呉の孫権に仕えた神仙家で、水上歩行の達人にして大酒飲みの葛仙公……などである。

そもそも役行者というのは、公式の教科書日本史にはほとんど出てこないものの、日本人の気質に、絶大な影響を与えている。神道・仏道・道教（神仙思想）を混淆させ、独特の山岳修験に仕立て上げたのはこの怪人物だ。いわゆる神仏習合、本地垂迹の元祖である。

壬申の乱に協力し、盟友ともいべき天武天皇（大海人皇子として吉野に隠遁した頃、薬草趣味

があった。また、役行者は、後に天武の勅願で室生寺を開山したりしている)の死後、役行者は政争に巻きこまれたらしく、天武・持統の孫、文武帝の時代に、国家反逆罪か何かで伊豆大島に島流しにあってしまう。神出鬼没でなかなか捕まらなかったが、母の命と引き替えで捕えられたということからも、神仏道に加えて、儒教の「孝」の体現者でもあっただろう。

日本文化というものは、縄文一万年を鍋底として、そこに大陸や、朝鮮半島、シルクロードからの雑多な渡来文化を、ぐつぐつと煮込み、さらに発酵純化させて、独特の色と味覚を醸し出したものだ。こういった日本の精神を、役行者は典型的に表している。この極東の島国が、パレスチナのような白黒はっきりつけようとする血で血を洗う戦闘テロリズム状態にならないのは、まさしく神変大菩薩・役行者の御利益によるものだというのを、私は決して疑わない。これが文化のふところであり、曖昧さの功德である。聖徳太子が政治的「和」の精神を象徴するなら、役行者は思想の共通分母の「融合・フュージョン」の象徴である。

そもそも、富士山麓や、筑波山、東北の出羽三山など、いたるところで高下駄を履いて杖をついた奇妙な老仙人の足跡と出くわすのは、何かあると見るべきだ。

むろん、実際に役行者が踏破していない広範囲の山岳地帯で、後の修験者たちが非凡な開祖を神格化象徴化し、イメージもどんどん肥大化させていったのだろう。

また、「私が開山したというのはおこがましい。やはりこの山には祖師様の名を冠しましょう」という弟子らしい心理も働いたことだろう。

このひょうひょうとした怪人は、前鬼、後鬼という妖魔を従えていたが、その鬼の末裔を名乗る一家が、一三〇〇年後、いまだに修験者相手の宿坊を営んでいるというから、吉野の歴史、いや日本文化は奥が深い。

面白いのは、弘法大師空海が修行した多くの山や瀧、洞窟などは、その遙か以前に、役行者が先鞭をつけていることだ。山林修行者時代の空海は、役行者がつけた道筋を、ひそかに追体験しているふしがある。密教の中でも、孔雀明王——孔雀が毒蛇を喰らうように、悪を善と化し、毒を妙薬と化す明王——を奉じる点でも共通している。役行者こそは、青年佐伯真魚（空海さんの幼名です）の心のアイドルであつたに違いない。少なくとも空海本人は、一時代前の先駆者のなまなましい実在を信じたはずだ。飛鳥白鳳期と平安期、この二人の巨人の時差は、およそ百年余りである。

怪我や病気も多いであろう修験者は、生活の必然から、薬草・毒草に詳しくなり、諸国を行脚するため、もろもろの政治情報にも通じることになる。長野の戸隠あたりは、修験者が実際に諜報活動を行っていたという。いわゆる忍者である。漫画に登場する忍者が智拳印を結んで、ドロドロと煙の中に消えるのは、まさに密教の世界観が入っているわけで、これは「修験者＝山伏＝忍者」そのものだ。権力と情報ネットワーク、そしてカルト宗教と秘密結社、薬物知識の混淆という、まさに現在の米国CIAや、英国MI6（007!）そのものだ。

あるいは役行者は、求心力のあつた文武帝の死後、皇后の持統天皇から、幼い文武天皇へと皇位が継承される混乱の中で、次第に圧力を増してくる藤原不比等の介入を、横目で察知していたのではないか。不比等——天智帝のブレインだった藤原鎌足の子——から見れば、この一世代ばか

り年長の神秘家は、自分の野望と策略を見抜く脅威としてマークしなければならなかったのかも知れない。この政治的異能者は、天武帝の頃は目立たず、女帝持統の頃になって、じわじわと頭角を現してくるのである。役行者の伊豆島流しという、ちょっと見には、政治に何のかかわりを持たない逸話は、不比等の朝廷乗っ取りという政治的アジェンダと、はたして無縁であろうか。

全国各地、少なくとも畿内には、役行者の弟子たち（スパイ・諜報員・忍者）が、法螺貝を吹きつつ歩き廻り、網目のように散在していたはずである。しかも、山の民「国栖びと」も、民間人のようなふりをして葛を売り歩き、都の情勢を、逐一、役行者やその高弟たちに報告していたかも知れない。祈祷師、薬師というのは、やんごとなき人々のかなりプライベートな情報、病状や台所事情、つまり誰が誰と宴を開いたとか、取引したとか、密通したとか、裏情報にも接することができるので、定住者である民間人よりも、スパイ化しがちなのである。これは、中央にとっては脅威のはずだ。やはり役小角は、天武帝系の参謀、諜報活動の親玉、影のCIA長官と目されて、用意周到に陥れられたのではないか。

『続日本記』によれば、朝廷で文武天皇を補佐していたという韓国連広足という男が、役行者の弟子であったにもかかわらず、「鬼神を使い、民を惑わす」など、あることないこと讒言したという。

何しろ文武帝は、十五歳で即位、二十四歳であっけなく崩御している。藤原不比等の娘、宮子と結婚させられているというから、たちまちキナ臭い匂いが、あたり一面もうもうと立ち籠めてくるのである。非皇族系の藤原（中臣）氏との婚姻などそもそもが論外であり、ここにはある強制力がなければならないはずだ。父の不比等の政略結婚の犠牲者であった藤原宮子は、哀れにも、生涯、重い鬱病持ちだったという。腹違いの妹の光明子とは、まさしく光と影のようなものだ。むろん光明子とは、後に聖武天皇のつれあいとなった光明皇后であり、不比等と、すでに人妻だった橘三千代との娘である。そして聖武天皇とは、ややこしくも恐ろしいことに、文武天皇と宮子との子なのである。まさしく天皇家の血筋に、その後の千年、ワラワラと「藤」の蔓のように絡みついて生きのびる、猛烈な姻戚関係の絵巻「藤原王朝」の始まりなのである。

二十歳ちょっとで崩御した文武帝の最大の功績は、七〇一年の大宝律令である。天智以来、数世代に渡った法律と官僚制度の完成であるが、これほどの大プロジェクトとなると、うぶな少年天皇にどうなるものでもなく、すぐそばに、高度に知的な専門家集団、エキスパート、プロデューサーがいたことは、容易に想像がつかだろう。その頭目こそは、藤原不比等であり、彼の宮廷権力に魅せられて手先と化したのが、役行者の弟子であった韓国連広足ではないか。

韓国連広足——この人物は、師匠の役小角の能力と名声を妬んだという。彼はモーツァルトに対するサリエリのような陰湿な嫉妬を抱えていたかも知れない。役職は典薬頭というから、いわば宮内庁医療部長官とでもいうべき政府高官である。その任命権者は、いったい誰だったのか。不比等こそは、天武亡き後に女帝の持統に食い込み、草壁皇子の教育係となり、皇室に側面から、秘かにマインドコントロールをかけてきた張本人、いわばラスプーチン的存在であった。その草壁の子で温室育ちの文武帝をそそのかすなど、文字通り朝飯前、赤子の手を捻るようなものだ。

「私のかつての師匠の役小角は、吉野の鬼と通じ、畏れ多くも朝廷の転覆を謀り、呪術で民を惑わしております」不比等の走狗となった韓国連は、声をひそめて世間知らずのうら若き天皇に、耳打ちしたことだろう。この人物は、多少の病氣直しの能力を鼻にかけ、大峰奥駈けや滝行など

の山林修行の厳しさを忘れて、宮廷の雅に目を奪われ、いつしか官僚化してしまった修験者の成れの果てだろう。おそらくは寒い夜には、ひそかに師匠ゆかりの葛湯などを啜っていたであろうに。恩知らずもはなはだしい男である。

一方、伊豆大島に流された役行者といえば、昼間こそ神妙にしていたものの、夜は五彩の雲に乗って、富士山頂で禅定に入っていたというから、のんきなものだ。あるいは富士の木花咲耶姫神や、江ノ島の裸弁天と、秘かにデートなどをしていたかも知れない。

しかも大島の住人には、いつのまにか聖として慕われている。「精神の自由」の達人に対して、世俗の政治権力などは、しょせん半分しか圧力がかけられないというわけである。

日本の歴史にはよくあることだが、こうした政治的謀略の反動で、そのうち都には異変が起こり、宮廷人たちも恐怖に陥った。飢饉や疫病が流行る。都びとはこれを聖を貶めた朝廷権力への仏罰と見た。

しかし、何かは隠蔽されている。

役小角については、影響力のわりに史実に乏しいのだ。

彼を巡るお伽話、ファンタジーで粉飾された数編の説話の背景に、天皇一家に食い込んで、右大臣の位を狙い、未来永劫に外戚となるという、藤原不比等の長期的野望のシナリオが、見え隠れしてこないだろうか。二人は、ほぼ同時代を生きている。

不比等とはびきりの知力、洞察力を持った黒幕、フィクサーである。どういうわけか、あの奈良時代に、突然変異で一人だけ、ユダヤ的戦略家が紛れ込んでいるようなものだ。『古事記』『日本書紀』編纂への不比等の支配力は、さらに他の物語作者たちへの隠然たる自己検閲を促さなかったであろうか。実在した役小角を、毒にも薬にもならぬ民話、他愛ない空想上の人物と化す。ことによると、天武や持統による役行者への言葉すら、抹殺されてしまったかも知れない。天武は、持統の重い病氣平癒を祈願して、あの薬師寺を建立した信仰者である。吉野山系修験の法力を、たのまないわけがない。となると、この精神的指導者の壬申の乱における働きや、政治的影響力を歴史の闇に葬り、霧散させてしまおうという作為が、見え隠れしていないだろうか。しかし以上は、冬の夜、葛湯の湯気から、しろじろと立ち昇ってきた妄想である。あるいは吉野の葛の精に化かされたのかも知れない。

——どうも、「藤」という文字が、ひっかかってならない。

藤は寄生した木にからまり、末代まで栄える生命力を持つ。それは天皇家の血の暗部に差し込まれ、微妙な恥部に絡みついた藤の蔓の尖端である。藤原という姓は、天智帝より中臣鎌足が与えられたものだが、一族の中でも不比等の血統のみに厳しく限定された。あの鎌足には、どこか世慣れた取りなし役、足して二で割る政治を好む、苦勞人ふうの長老的風格があった。しかし、息子の不比等は、まるで近代知の権化のようだ。一種ファウスト的、イワン・カラマーゾフ的な闇が漂う。藤原史が藤原不比等の名へと変貌していく精神過程には、何かただならぬ恐ろしい自意識のドラマを感じるのは、私だけではないだろう。それは、歴史も政治（つまり、これが時空だ）も、掌中にせんとする権力への意志、絶対黒幕とでもいうべき《超人》への野望である。

梅原猛が、面白い説をとらえている。

『古事記』の口述者の稗田阿礼とは、藤原不比等のペンネームではなかったか、と。

確かにこの稗田阿礼は、一度聞いたもの、見たものは忘れないという異常な記憶力の持ち主とされながら、なぜか『日本書紀』はもちろん、他の文献には登場せず、まったく実在感が希薄なのだ。コンピュータのない時代、それほどまでに便利な才能が、『古事記』編集に限ってのみ重宝されたというのは、奇妙ではないか。位階や墓まで具体的にわかっている共同編纂者の太安万侶と比べても、存在感が薄過ぎる。従って『古事記』とは、あえて正体を隠さなければならないある人物が、フィクション上のキャラクター、つまり小説的登場人物を通して、日本史を語っている、という体裁かも知れないのである。

それはさておき、「葛」と「藤」。

「かつとう」という言葉がある。

役小角と藤原不比等——二人のカリスマ。その後の日本の精神世界と政治制度を決定づけた二人の傑物。吉野の山中奥深く、無骨ながら人々に滋養を与え、活力を与える植物「葛」。そして、雅やかな宮廷文化を装飾する「藤」。

ともに宿主の木（「玉」・皇統）に絡みつき、不定形な蔓を這わせる二種の植物である。その蔓の遺伝子が、日本歴史の中で二重螺旋を描いて「葛藤」しつつ、DNAのように絡み合っている。

いってみれば韓国連などは「葛」の志を忘れ、「藤」の華やかさと権力に酔った男である。

「葛」の心は、一三〇〇年の後、吉野熊野に伝えられる日本の根源的精神の潮流として、「紀伊山地の霊場と参詣道」の名称で、ユネスコの世界遺産に登録された。一方「藤」は、いうまでもなく大藤原氏の血統として、近衛、三条、九条、西園寺など、今日までにさまざまに名を変えつつ、いまま日本のエスタブリッシュメントとして隠然たる影響力を持つ。しかし、その藤棚を支えているのは、血なまぐさい陰謀、暗殺、政略結婚の繰り返しである。

とはいえ、「葛」と「藤」とは、良くも悪くも、日本文化の両面なのだ。

碁盤の目のように整理された京都（このような座標軸のような都市計画は、藤原京を最初のモデルとしている）が、雅やかな日本の顕在意識であるとするならば、吉野熊野の山岳地帯は、鬱蒼

と木々が生い繁る潜在意識、深層心理ともいうべき緑の混沌だ。あるいはダイナミックな創造の闇、とでもいうべきか。そこは隠れ潜むべき山里であり、京を映し出す鏡であり、異界への通路であり、始原の湧水であり、世俗を捨てて禊を行う秘境、死と再生、胎内回帰の岩屋である。

ちなみに役行者は、度重なる異変を怖れた文武天皇による大赦の後、七〇一年に遷化したという。これは大宝律令制定の年だ。あの不比等一派の計略により、世界が明確に座標化され、管理化されていこうとする年に、天上界へと旅立ったというのは、きわめて象徴的だ。また、不比等からしてみても、己の手中にした権力による世界の一元統制というシナリオにとって、役行者のもたらすであろう「異次元」などは、この世から早々と消去してしまいたかったであろう。政治にエビファニーは無用である。

ドストエフスキーが『カラマーゾフの兄弟』で提示した「キリストと大審問官」の構図をここにあてはめるのは、あまりにも飛躍がすぎるであろうか。

役小角の遷化。文献には、相変わらず雲をつかむような話書いている。鉄鉢の中に、老母を小さくして吸い入れ、五色の雲に乗って、はるか唐天竺へと飛び立ったそうだ……。

*

——本稿を、まがりなりにも「吉野葛」と題したからには、谷崎の作品に触れないではすまされないだろう。大学時代に『吉野葛』を読んだときは大して感動もせず、谷崎潤一郎の短編にしては退屈だ、ぐらいにしか思わなかった。それで今回、実家にあった黄ばんだ角川の昭和文学全集第十五巻をあらためて紐解いてみた。やはり『刺青』『武州公秘話』『卍』の青白い妖しさや、『春琴抄』『痴人の愛』『細雪』の芳醇にして艶やかな美は、ここにはない。

前段で後南朝系の自天王の話をしているので伝奇的興味をそそられかけるが、後半は一高時代の同窓の「津村」の恋愛話、そこに山歩きや、義経と静御前の逸話、谷崎の母恋いが絡められているものの、尻切れトンボに終わっている。「オチ」のある小説の旗手としては、もどかしい作品だ。作者もさすがに照れたのか、ラストで「私の計画した歴史小説は、やや材料負けの形で、とうとう書けずにしまった」など、書かずもがなの感想まで述べている。

小説の構成としては中途半端ではあるものの、再読してみると、地名をまったく知らなかった学生時代とはうって変わって、記憶の中の風景が甦ってくる快感があった。谷崎の視線で吉野山中を彷徨する紀行文として、しみじみと楽しめる落ち着いた佳品である。この作品の一行一行の地名を確認しつつ、吉野の山里を自分の足で巡るのは、発見に満ちた旅だろう。

私は、古い格子造りの家の「貧しいながら身だしなみのよい美女」のような清潔な障子や、「どろどろに熟れた柿の実、ずくし（熟柿）」の描写、そして国栖村の紙漉き娘の白い水に浸った指の「一種いぢらしい美しさ」の描写を堪能した。

南朝秘話に彩られた岩や、溪流や、旧家の佇まいが、山霧の向こうに見えてくる。そしてこの作品で、古来からの紙漉きの様子が紹介された国栖村とは、あの天武帝を匿った「くずびと」の山里であり、一高の同窓「津村」の亡き母の故郷であった。谷崎は自身の母恋いの情を、友人の逸話に託して、吉野の僻村に沈めたい。この懐かしい温もりに満ちた景色は、谷崎の中の心象風景として、ゆっくりと、じっくりと、発酵されていったはずだ。本格的な吉野の桜を堪能するには、後年の名作『細雪』まで待てばよいのである。

ちなみに食品としての吉野葛であるが、血管拡張、血圧・血糖値安定、肝腎機能の強化、デトックス、免疫力強化など、内臓循環器系への効能があり、漢方では『神農本草経』の昔から、上薬として尊ばれてきたようだ。冷え性（低体温症）の女性に教えたら、えらく喜ばれた。葛湯を飲むと、翌朝の冷えがなくなっていたらしい。彼女は、手が温かいという実感を初めて体験したようだ。注意しなければならないのは、べつに製造元にはこだわらなくてもいいのだが、あくまでも、葛粉が百パーセントの「本葛」を選ぶことだ。

ジャガイモ、サツマイモ由来だと、野趣あふれる葛ならではの微量成分や酵素が期待できない。これまではほとんどの場合、芋でできた粉い物を、葛湯、葛切りだと思いこまされてきたらしい。やはり「偽装」では駄目なのだ。山里で育った生命力あふれる「本葛」は、特筆すべき自然のサプリメントであり、古くて新しい「機能的」伝統食品なのである。

吉野の山々は、桜や詩歌のみならず、歴史、宗教、文学、本草学、政治的謀略、御落胤伝説など、さまざまな逸話にあふれている。これは汲めどもつきぬ象徴に満ちたわれわれの共有財産だ。葛湯や葛菓子を食べながら、そんなことに思いを馳せると、心身ともに深く温まってくるのである。

(了)

「吉野葛」をめぐる冬の夜の幻想

<http://p.booklog.jp/book/37930>

著者 : Grasshouse

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/37930>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/37930>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.